

肖像、ワーニャおじさん

A Translation of Virginia Woolf's "Portraits" (1942)

坂本正雄訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2013年10月4日受理

ブランチを待ちながら

ハチドリが花卉のなかで身体を震わせる。象が石のような巨大な足で泥の中をびしゃびしゃと進む。野獣の目をした蛮人が葦藪を避けて、丸木舟を漕いでゆく。ペルシャ女が、わが子の髪の毛からシラミを取ってやる。シマウマが求愛のアラベスクを踊りながら、地平線を狂ったように駆けていく。頭上にぼっかりあいた青黒い空にハゲワシがくちばしをならす音が響き渡る。とんとん、とんとん。肉はほとんど付いていなくて、しっぽも半分だけになった骨をつついていっているのだ。ルボワ夫妻にはそうしたものは眼に入りもしなければ、耳にも届かなかった。

ひだ折りのシャツ、光る生地の上着を着たギャルソンが、エプロンを腰中程に結び、髪を後ろになでつけ、つばを両手に吐きかけ、皿を拭き、すすぎの手間を省く。路上の雀たちが、くその固まりの上に集まっている。平面交差の鉄の門が閉まる。往來が凝り固まる。鉄の手摺り付きのトラックが一台、オレンジのかごを乗せたトラック、乗用車が数台。ロバに牽かせた二輪車。老人が公園で、紙袋を串刺しにする。今はやりのジャングル映画が上映中だと、映画館の電飾がきらめいて知らせる。北の空、灰青色の雲がセーヌ川の水面に一瞬、同じ色の光を輝かせる。ルボワ夫妻はマスタードの瓶と薬味瓶を見つめていた。テーブルの大理石天板の茶色のひびを見つめていた。

ハチドリが震える。鉄の門が開く。トラックがぐつと動き始める。するとルボワ夫妻の目は輝きに満ちてくる。ふたりの前の大理石天板のテーブルに、髪をなでつけたギャルソンが料理を一皿、投げ出す。

車中のフランス女

おしゃべりで、だらしなく、じくじくのキャベツの芯に向かってバクみたいに鼻をクンクン鳴らす。葉っぱに鼻を突っ込む。三等の客車の中でもこうしてうわさ話に夢中になっている。マダム・アルフォンスはコックに言った。イヤリングが厚皮の怪物の大きな耳たぶの中で揺れるように揺れる。シュッとというつばの音

が前歯から漏れる。歯はもう黄色くなって、丸くなっている。それでキャベツの芯に噛みつく。そしてずっとその間、ゆらりゆらりと揺れるその顔、したたり落ちるつばの向こうにプロバンスのどんよりとしたオリブの葉がきらめき、そしてある地点まで来ると、背景がくしゃくしゃになり、そこにねじれた枝々、腰をかがめた百姓がいるのだった。

三等の客車でロンドンに着くと、駅の黒い壁にはてらと輝く広告が塗りたくられていた。マダムは途中クラバムに寄り、ハイゲイトへと道を急ぐ。ハイゲイトに着くと、夫の墓に載った陶器製の花輪を取り替えた。クラバムの駅では黒いバッグを膝に乗せ、指定席に座っていた。バッグには『メール』紙、王女たちの写真が入っていた。バッグは冷肉のにおい。そしてピクルス、テント地のカーテン、ああ、それから教会の日曜の鐘、教区牧師の訪問。

マダムはその大きく起伏のある肩に伝統をのせている。口からよだれを落とすときも、イノシシのような眼が輝くとき、野生のチューリップの花の中にいるカエルの鳴き声が聞こえてきた。地中海の波が砂に寄せる音。モリエールのことばも。ほら雄牛の首には幾箆ものブドウがぶら下がる。汽車の音の向こうに市場の騒音が聞こえる。台所で切られる雄羊、男たちがそれに乗りかかる。籐籠のあひる、ソフトクリーム、チーズの上に広げられるイ草、バターの上にも。鈴掛の木の下でペタンクをやる男たち。部屋の隅のいやな匂い、そして農民たちは率直に自然の掟に従う。

肖像三

わたしはフランス宿の庭に腰を下ろしていた。存在の秘密というものは戸棚の中に秘めたコウモリの骨に過ぎないと思えた。謎々なんて、蜘蛛の巣の十文字。そう思えるほどに女はしっかりと存在に見えた。日向に座っていた。帽子はかぶっていなかった。光が女に当たっていた。影がなかった。顔は黄色く赤かった。丸くもあった。身体には果実がひとつ。そしてもうひとつリンゴの実が。ただ皿の上に載っているの

はない。身にまとったブラウスの下に、その胸がリングの形をなしていた。

わたしは女を見つめていた。女は、ハエが歩きでもしたように、肌をぴくりと動かした。誰かが通りすぎた。わたしはリングの木々の細長い葉、女の目がきらりと光るのを見ていた。肌の荒れ、ひどさは苔のついた木の皮だった。女は永遠の存在だった、そして人生の問題をすっかり解いてしまった。

肖像四

女は男をハロッズ百貨店、ナショナル・ギャラリーと連れ回した。男がラグビー校に戻り、文化を吸収する前にシャツを数枚買わなくてはならなかったからだ。男は歯を磨かなかった。もしそれなりのもの、でも高すぎるわけでもないものを食べたいと思ったらねと、ハルおじさんが勧めてくれたレストランに腰を下ろし、女は男がラグビー校に戻る前に言うべきことを考えなくてはならなかった。オードブルが来るまで時間がかかった。戦争の前、薄茶の髪若者と、ここで食事をしたことをはっきり思い出すことができた。あの人はわたしのことを褒めちぎった。それでいて実際には結婚してくれとは言わなかった。でもそれをどう伝えればいいだろう。父親にだんだん似てきていること。自分が独り身であること。実際に結婚した相手は戦争で死んでしまったこと。歯は磨いたのかしら。ミネストローネにしようかな。そうね。それからその後は。ウィナー・シュニツェルだね。それとも若鳥ソテーのマランゴ風かな。マッシュルームをつけて。新しいかな。この子がよりどころにできること、助けになることを何か言ってやらなくては。そう、誘惑の瞬間にも頼りになること。「あなたのおばあちゃんはね」。なんてまどろっこしい。隣のテーブルはオードブルだけど、もうサーディンはとうの昔になくなっているわ。

そうしてジョージは黙って座っていた。鯉の目で、冬が浸透してくると、水面をたたく鯉の目で、そしてソーホーの安料理屋のデカンタの縁に飛び回るハエ、女たちの足を見ているのだ。

肖像五

「わたしもどうせあいつらのひとりなんだわ。」満足をこころに秘め、白い砂糖がけのタルトを見て言った。「いつもなら、なんでもおそろおそろ、口に入れてみるのだ」。ほんのひとくち食べてみた。それはまだしっかりとした三日月の形をしていた。

そしていま三又のフォークを口の途中まで持ってきて、おんなはまるで自分が母親、あるいは姉、あるいは妻の優しさに満ちていることを示すかのように、毛皮のコートをなでようとしていた。部屋に猫しかいなくとも、猫をなでたのだ。それからもう一滴、いつ

も持ち歩いている香水瓶から垂らした。自分の中の余りほめられない部分がかたにはいやな具合に出てきそうなきにはそうした一滴でごまかすためだ。そして付け加えた。

「あの病院の医師たちときたら、わたしのことをおばちゃんだって」。それから、今描いた自画像が正しいものか、そうねと言うのか、まさかと言うのかを待つみたいに、向かいに座った友人を見つめた。でもなんの反応もなかったの、おんなは砂糖がまぶしてあるタルトの最後の一切れにフォークを突き刺し、飲み込んだ。人間以外だったらきつと、うれしい返事をしてくれただろうとでも言うように。人間なんて、自分のことしか考えていないのよ。

肖像六

つらい経験だった。八十年代の生まれなら、この国ではいくぶん追放された者の気分。襟のボタンホールにバラの花の一本さえちゃんと差せやしない。親父みたいに、ステッキを持ってた方がいいんだ。シルクハットよりは、てっぺんにくぼみの付いたフェルトの帽子をかぶらなくては。ポンドストリートを歩くときにはね。それでもぼくは、この世界、このことばが妥当だとすれば、この世界が好きなのだ。ひだ飾りつきの紙に包まれたアイスのひとつみたくに等級分けされているとしても。たしかにベスナル・グリーン(訳注: Bethnal Green. ロンドンの、現在Tower Hamletsの一部)のイタリア人たちはベッドの下に隠しておくという。オスカー(訳注: 当時人気だったOscar Wilde)は機知が効いている。それから女が唇を真っ赤に染めて、ワックスの利いた床の上に敷いた虎の毛皮の上に立っている。虎の口があんぐり開いている。「でもあの女はね、絵が描けるのよ。」(そう母は言った) もちろんピカデリーに住む女どものことだ。そこがぼくの世界。いまでは誰でも絵を描く。ポンドストリートでは何でもが砂糖みたいに真っ白、家だってコンクリート造り、すこしばかり磨き上げられている。

ぼくはさめたものが好きではあるのだが。たとえば、ベニスの写真。橋に立つ女の子、魚釣りの男、日曜日のひと時、それからたぶんゴンドラ。ぼくは休みで、つぎのバスを待っているところ。メイベルおばさんといっしょにアジソン通りでお茶にするんだ。おばさんの家にはぼくがほしいと思っているものがある。山羊、つまり歩道でひなたぼっこしている山羊だ。とりわけ目を引く上品な年寄りの山羊だ。そして乗合馬車の御者は、アカコクジャクの羽を鞭の尻にぶら下げている。ぼくみたくな若者は御者の隣の箱席に座っている。

でもピカデリーに入ると、みんなトネリコのステッキを振り回している。帽子をかぶってないものもある。みな紅を差している。取り澄ましたもの。まじめな顔のもの。近頃の若者たちは何をしでかすか分からない。

レース用の自動車に乗りこんで、革命へと突き進む。サリー(訳注：四人乗り自動車)を乗り回すものの楽しみはきっと、燃料のにおいだ。街角を見してみる。ほこりにまみれて、枯れてしまったバラの巻き付いた赤煉瓦塀。ぼくでなければだれも気になんかしていない。まあ、それからエドウィンおじさんも、メイベルおばさんもかな。ふたりはこうしたひどい光景に対し、ささやかな灯火を掲げているのだ。ぼくたちにはできないことだ。ふたりはふっと気を失い、膝を折り、そして古いシャンデリアをぼくたちの頭上に落とすのだ。いつも言っていることだが、誰だって、皿を投げつけるくらいのはできる。でも感心するのは、古い磁器だ、それも鋳留めにされたね。

肖像七

そう、わたしはヴァーノン・リー(訳注：1856-1935、英国の評論家で本名はViolet Paget。つぎにFra Angelicoの名が出てくるが、イタリア・ルネサンスの美術批評を行った)と知り合い。言い換えるとね、二人で別荘を持っていたの。わたしは朝食の前には起きて、混み合わないうちに、美術館巡りをしたの。わたしはね、美しいものには目がないの。ええ、自分では絵は描かないわ。でもそれだからこそ芸術のことがよく分かるってことよ、たぶんね。芸術家って、心が狭いわよね。近頃では生き方も狂気じみてるし。ほら、フラ・アンジェリコ。跪いて絵を描いたのよ。でもわたしが言いたいことは、ヴァーノン・リーと知り合いということ。あの、別荘を持っていたわ。ふたりの別荘も。一軒は、藤がたれていた。ふたりの別荘にライラックの花があったのと同じ。でもそれより良かった。それからハナズオウの木も。ああ、どうしてケンジントンなんかに住んでいるのかしら。イタリアじゃなくてね。でもいつも思うの。本当はフィレンツェに住んでいるんだって。気持ちね。わたしたちが住んでいるのは、本当の生活を送っているのは、心の中よね。だからこそわたしは美しいものが必要な人間というわけ。それがただの石であろうが、壺だろうが。説明はできない。とにかくフィレンツェに住んでいれば、美しいものを愛する人に会えるわ。ロシアの皇太子(訳注：ロシア皇太子ニコライが地中海や日本を訪れたのは、1890~1891年のこと)にも会ったわ。それからパーティではとっても有名な人にも、名前は忘れたけど。それからある日のこと、別荘を出て、道に立っていると、小さな老婆が犬を鎖につないで、道をやってきた。ウィーダ(訳注：Marie Louise de la Ramee(1839-1908)英国の女流作家の筆名)だったかしら。それともヴァーノン・リーでもいいわ。話はしな

かった。ある意味、本当の意味でね、美しいものを愛するわたしはいつも思うの、感じるの。ヴァーノン・リーと知り合いなんだって。

肖像八

「わたしはごく普通の人間だ。考え方は古いかもしれない。でも永久不変のもの、愛とか、名誉、愛国心なんかをこころの頼りにしている。また妻を愛していることもこころの支えだ。そのことを口にするにやぶさかではない。」

そう、「人間なんて無価値なもの」(訳注：Nihil humanum)ということばはよくきみの口に上るもの。でもラテン語をあまり喋らないように気をつけたまえ。だって、金を稼がなくちゃいけないからね。ひとつは生きるため、それから国会に出るため。アン女王朝様式の家具だね。ほとんど模造品だ。

「頭がいい方ではないよ。でもこのことは言っておく。わたしだって気骨はあるんだ。牧師のことも、酒場の主人のこともよく知っている。飲み屋に行けば、仲間とダーツだってやる。」

そう、きみは中間物、仲介者。ロンドンの夜会服だ。田舎ではツイード。シェイクスピアもワーズワース(訳注：ShakespeareもWordsworthも名前はWilliamで、その愛称はBill)もきみには同じ名前。

「どうしても言っておかなくてはならないいやな奴は、例のあそこに住んでいる、気の利かない奴らだ。」

山の手の方かな、それとも下町。きみはその中間なんだよ。

「わたしには家族がいて…。」

そう、大家族だからねえ。きみたちはどこにだっている。畑の中を歩いてみれば、キャベツには何がとまっているんだっけ。中間。迷える羊たちに病いをもたらす中途半端な奴ら。月でさえきみたちの影響を受けるんだ。もやがかかるからね。天にかかる大鎌の銀の刃(こういう言い方をするのを許してくれ給え)でさえ、頭の鈍いきみだったら、曇らせ、見苦しくない程度にはしてしまふ。そしてぼくは、さびしい浜辺で鳴いているカモメたちに、それから妻の元へと帰る農夫に、わたしたちの、男も女も、行く末はどうなるんだろうと尋ねるのだ。もし中間族が自分たちの思い通りにやり始めたら、そして恋人も友達もなく、中間の性しかいなくなったら。

「そう、わたしはごく普通の人間だ。考え方は古いかもしれない。でも本当にこころから思うんだ。そう、認めることは構わない。自分と同じ種の人間を愛することが大事だってことを。」

『ワーニャおじさん』(訳注: チェーホフ作、1899年初演)を見て
A Translation of Virginia Woolf's "Uncle Vanya" (1937)

「なんでも分かるわけじゃないのかしら、ロシア人たちは。わたしたちが身にまとった仮の姿とか。枯れないようにした花。もしもの時のための金貨とピロートの服。サクランボの木、リンゴの木。そうしたことは見通せるのよね。女は劇を見ながら思っていた。それから銃が鳴り響いた。

「ほら、あの役者、引き金を引いたわ。好都合だわ。あら、でも、弾が外れたわ。あの悪役、ほおひげを染めて、チェック柄の外套を着て。全然けがをしていないじゃないの…。それでも相手はまた撃とうとしている。それから突然直立して、よろめきながら階段を上って行って、銃を構えた。引き金を引いた。弾は壁の中に食い込んだわ。テーブルの脚にも、たぶん。何の変化もない。『ワーニャさん、全部水に流しましょう。昔のように仲良くしましょう。』男は言っている…。さて、ふたりは出て行った。今度は遠くから馬の鈴が鳴っているのが聞こえてくるわ。あれはみなわたしたちには現実のことかしら。」女は言った。顎を手にのせ、

舞台の少女を見た。「道をやってくる鈴の音がわたしたちには聞こえているのかしら。」女は疑問を口にした。それからスローン通り(訳注: ロンドンの一角)を走るタクシーやバスのことを考えた。だって、作家たちは通り近くのカドガンスクエアの大きな邸宅に住んでいるんだもの。

「ひと休みしましょう。」少女は言っていた。少女はワーニャおじさんを腕に抱きしめていた。「休みましょう。」少女は言った。そのことばは雨粒がしたたり落ちるようだった。一滴、そしてまた一滴。「休みましょう。」少女は再び言った。「休みましょう、ワーニャおじさん。」そうして幕が下りた。

「わたしたちだったら。」夫が外套を着せてくれた。「銃は持っていないし。くたびれてもいないわ。」

それからふたりは劇場の通路にちょっとした間、じっと立っていた。俳優たちが国歌を歌っていた。

「ロシア人って、陰気なんじゃないかしら。」女は、夫の腕を取りながら、言った。